

Title	手塚豊先生の思い出
Sub Title	
Author	森, 征一(Mori, Seiichi)
Publisher	慶應義塾大学法学会
Publication year	1991
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.64, No.4 (1991. 4) ,p.140- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	手塚豊先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19910428-0140">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19910428-0140</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ったそうである。「手塚さん、君は本塾を卒業してすぐに大  
学に残った人ではなさそうだね」と。説明役の先生も流石な  
ら、先生の説明の冒頭部分を聞いただけで先生の経歴を素早  
く見抜いたK財務理事も流石、というべきであらう。

そのような抜群の事務的才能の持ち主であったために違  
ない。先生が義塾の常任理事に擬せられているとの風評が塾  
内に流れたことが二度ほどあったが、いずれも噂のままで立  
ち消えてしまった。

私が法学部一年に入学し、その年に初めて先生の講筵に列  
してから、四十年を閲した。四十年の歲月の歩みのなかに去  
来した数々の出来事に想いを馳せるとき、先生の温顔、いま、  
わが眼に在る。

『三田評論』九一七号（平成二年八月発行）より転載。

なお、転載を許可された『三田評論』編集委員会の  
御厚情に感謝の意を表したい。

法学部教授 向井 健

## 手塚豊先生の思い出

先生に初めてお目に掛かったのは、私が大学院生の時であ  
った。私は、ヨーロッパ法史の勉強をしたい旨、率直に申し  
上げたのだが、先生は初対面の学生の話を黙ってお聞き下さ  
り、「報われることの少ない学問だが、その覚悟があるなら  
勉強をしてみなさい」と激励して下さった。その後、私は法  
史学の助手として採用される幸運に恵まれ、以来、先生の公  
私にわたるご指導を賜わることとなった。

先生は厳しい指導者だった。私が明治法制史の論文を書く  
ときは、先生に必ず見て頂いたが、必ず真っ赤になって帰っ  
てきた。こと史料に関しては妥協を許さなかったし、史料に  
対するあくなき探究心はすざましいものだった。私がイタリ  
ア留学を終えようとしていた頃、先生に帰国日をお知らせし  
ようと国際電話をした折に、先生は「バテルノストロというの  
は発見できましたか」と言われた。バテルノストロというのは  
明治期に来日した司法省雇いのイタリア人法律顧問である。

「発見できませんでした」と申し上げると、「何が何でも帰国  
までに見つけたしなさい」とのことだった。私は受話器から  
伝わってくる先生の気迫に押されて、シチリアに向かったこ

とを、昨日のように懐かしく思い出す。先生は、本当の意味での史料実証主義者だったように思う。しかし、ご本人は、ご自分の学問に不満をお持ちの様子だった。「私のようなやり方は、私で終りです。これからの学者は、こんなやり方ではいけません」と言っておられ、外国語、とくにフランス語の重要性を説かれ、ご自分が外国語が不得手であることを残念がっておられたことを思い出す。

先生はなぜか乃木大将を敬愛されていた。私はその理由を聞きそびれてしまった。それは先生にお尋ねしてはならないことのように思われた。先生の明治への憧れにも似た思いとそれによって支えられた先生の学問の謎を解く鍵のように私には思われたからである。それは先生の幼少時にお父上から聞かされた原体験によるものだとこのことを、先生が亡くなった後、知った。

先生は愛妻家であった。先生の論文も奥様との二人三脚の共同作業から生まれた作品であると私は思う。奥様が亡くなった後、「奥さんがいないと、勉強がよくできるぜ、森君」と強がりをおっしゃったことがあった。しかしまた、「奥さんがいなくなったので、手書きの史料が読めなくなってしまうよ。論文がなかなか進まない。」と寂しくおっしゃってました。真意だったように思う。私はそのように正直にものごとをおっしゃる先生が本当に好きだった。書の道を究めてお

られた奥様は研究の面でも先生にとってなくてはならない伴侶であったように思う。私には、そのようなご夫婦は微笑しくも羨ましくも感じられた。

先生の人生は「努力」の人生であったように思う。先年、私は先生から陶器のペン皿をいただいたことがある。そこには「努力」と毛筆で書かれてあった。それは先生が書をしたため、奥様が焼かれた、お二人の合作第一号とのことであった。書道は奥様から教わっていると、照れながらおっしゃっておられた。私は「努力」という字が隠れるように、たくさん鉛筆を入れて使わしてもらいます」と申し上げると、困ったやつだなあ、という表情をされて、笑っておられた。

先生は、言うまでもなく日本近代法史研究の開拓者のお一人だった。それだけに先駆者に求められる、血のにじむような努力が必要であったように思われる。そのような思いが「努力」という文字になって表われたのではなからうか。研究に打ち込まれる先生をご覧になって、お嬢様は「絶対に学者とは結婚すまい」と心に決められたという。

先生は歩くのが好きだった。第二次大戦中に日吉から志木のご自宅まで歩いたことを考えると、大したことではない、と高輪から霞が関まで歩かされて、閉口したことがあった。「私の健康法は歩くことだよ」と言っておられた先生が、慶応病院のベッドで、寂しそうに「もう歩くことができなく

なったよ」とおっしゃったときは、お気の毒で、言葉がなかった。

先生は入院されてから少し気弱になられて、「もう勉強は止めたよ」と言われることもあった。しかし、最後の、末期の苦しみの中でも、研究のことをお忘れにならず、逝かれた私は病床での先生のその姿に感動すら覚えた。私には、いつも「問題が次から次へと湧いてきて、いくら時間があっても足りない。」と言っておられた先生らしい最後であったように思う。

先生から最後に頂いたのは「忍」と毛筆で書かれた色紙だった。

最後に長年にわたり先生のご指導を頂いたことに感謝し、先生から受けた学恩に報いるべく精進することをお約束し、先生のご冥福をお祈り申し上げる次第である。

法学部教授 森 征 一